

令和7年度(2025年度) 島根県立大学入試対策 類題演習

国際関係学部 国際関係学科 国際関係コース

模擬試験: 地政学的境界の再定義

【解答時間 90分】

- 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

国際政治における「境界線」とは、単に地図上に引かれた実線ではない。それは、ある時代における権力、利益、そして価値の均衡点を示す動的な「界面」である。二十世紀後半の東アジアにおいて、この境界線は物理的な軍事境界線や国境線として冷徹に可視化されていた。その象徴が朝鮮半島の北緯三十八度線である。この線は、元来は第二次世界大戦終結時に米ソ両軍が日本軍の降伏を受理するための便宜的な陸上作戦の境界線として設定されたものに過ぎなかった。しかし、東西冷戦という世界的な構造対立がこの地域に波及するなかで、それは単なる軍事上の境界を超えて、二つの相容れない体制を隔てる「鉄のカーテン」の一部へと変質したのである。

この歴史的プロセスの背後には、大日本帝国の崩壊という巨大な地政学的変動が存在した。かつて帝国の版図が日本列島から朝鮮、満洲、東南アジアへと拡大していた時期、そこには一つの巨大な統治空間が存在していた。しかし日本の敗戦によってその空間は一挙に消失し、そこに冷戦の舞台となる(a)巨大な「力の真空」が発生したのである。この真空をいかに埋めるかという米ソの安全保障観の対立が、結果として朝鮮半島の分断を招き、さらには独立と統一の「相克」という不都合な状態を固定化させることとなった。

(中略)

ここで我々は、国際政治学者・高坂正堯が示した洞察を想起する必要がある。高坂によれば、国家は単なる軍事的な「力の体系」であるだけでなく、経済活動を構成する「利益の体系」、さらには言語や習慣に体現された「価値の体系」という三つの側面を併せ持った複合物である。物理的な国境線が「力の体系」を象徴していた時代に比べ、現代の新たな境界線を巡る対立は、この三つのレベルが極めて複雑に絡み合っている。

特定のハイテク技術を巡る国家間の対立は、軍事的な優位(力)だけでなく、巨大な市場の独占(利益)、そして個人のプライバシーや自由をどう定義するかという倫理観(価値)の対立をも内包している。(b)国家間の平和の問題を困難なものとしているのは、現代の対立がこの三つのレベルの複合物だということなのである。

問1 下線部(a)について、筆者はなぜ日本が「力の真空」を発生させたと述べているのか。文章中の語句を用いて、180字以内で説明しなさい。

問2 下線部(b)について、「現代の平和の問題」がなぜ困難であると筆者は考えているのか。筆者が述べる国家の三つの側面に触れながら、200字以内で説明しなさい。

問3 筆者は、現代の境界線が「物理的な国境」から「経済や技術のネットワーク」へと再定義されていると述べている。この変化は、国際社会においてどのような緊張や対立を生む可能性があるか。本文の内容やこれまでの学習をふまえ、東アジアにおける具体的な事例を一つ挙げながら、あなたの考えを600字以内で述べなさい。